令和６年度　国立中央青少年交流の家

令和6年度 全国高校生体験活動顕彰制度
「地域探究プログラム」地方ステージ（関東甲信越ブロック）

令和７年１月 18 日（土）・19 日（日）　１泊２日

○趣旨

各自が行った実践活動について発表するプレゼンテーション活動を通して、まとめる力や表現力を養うとともに、他者の発表や自身の発表への講評を聞くことで、新たな気づきや学びの機会とする。また、出場者が提出した報告書及びプレゼンテーションについて審査し、全国ステージに出場する代表者を選出する。

○参加者

高校生　８名（宿泊８名）

○評価委員

吉田　寿美　（東京都立上野高等学校　統括校長）
関谷　葉子　（株式会社エフエム御殿場　代表取締役）
藤原　一成　（国立中央青少年交流の家　所長）

○事業の内容

（１）インフォメーション・開会式

国立中央青少年交流の家　企画指導専門職　鈴木　俊輔

評価委員の紹介や自己紹介を行うとともに、審査についての説明を受けたり、発表の順番を確認したりすることで、発表に対するモチベーションを高めた。開会式の様子は YouTube でライブ配信を行った。

（２）リハーサル

実際に発表を行う会場で、機器の確認を行いながら、発表の仕方、発表の時間等についてリハーサルを行った。

（３）審査

・グループ部門１組
掛本萌衣、勝又朝日、鈴木颯士郎、柴田紘希（静岡県立御殿場南高等学校）
・個人部門４人
江幡崇（茨城県立水戸桜ノ牧高等学校）
野村奏実（浜松聖星高等学校）
市川杏（星陵高等学校）
生天目真希（静岡県立小山高等学校）

これまで行ってきた実践活動について、オリエンテーション合宿等で学んだことを生かして、審査に臨んだ。身振り手振りを使ったり、声の強弱を意識したりするなど、プレゼンテーションを聞く相手のことを考えながら発表した。また、今後の実践活動の計画や展望についても、発表に加えることができた。
これら発表の様子は YouTube でライブ配信を行った。

（４）交流会

国立中央青少年交流の家　企画指導専門職　鈴木　俊輔

１日目の夜に参加者による交流会を行った。フライングディスクを使ったアルティメットというスポーツを通して親交を深めた。この競技はフェアプレーを重視したセルフジャッジ制を導入していることが最大の特徴で、自分の意見と相手の意見を考慮し判断をすることが求められるため、参加者同士で積極的にコミュニケーションを取りながら楽しむことができた。

（５）表彰式・閉会式

国立中央青少年交流の家　企画指導専門職　鈴木　俊輔

評価委員からの講評や観覧者からのフィードバックを受けた。今後の活動に向けて、意欲を高めることができた。

《事後アンケートより》

【新たな気づきや学びがあった】　４段階評価で４が 100%
・自分にはない視点があり、それを学ぶことができた。
・それぞれの個性を知ることができた。
・人によって見る視点が違うことが分かり、新しいことに興味が持てた。
・どうやって問いを立てるかについて学ぶことができた。
・聞く人が興味を持って聞けるように発表を改善したいと思った。
・他の人の表現や行動を自分もできるようにしたいと思った。
・視野が広がったことと、話し方のコツが分かった。

【『探究的な学び』に関する理解が深まった】　４段階評価で４が 100%
・探究について詳しく知ることができた。
・学校ではできないことを行うことができた。
・自分にないものを学べた。
・疑問を持つ、調べる、課題と問いを立てる、ゴールに向けて活動するという探究の基礎を学べた。
・自分たちに足りないものが分かり、それについて話し合いができた。
・課題発見、改善策、行動という活動を通して、探究の楽しさを知れた。
・失敗に負けず、試行錯誤を続けることが探究であることを知った。

○１泊２日の事業としたことで、発表以外にも食事や交流会等を通じて、他県の高校生と交流し、親交を深めることができた。
○評価委員を、本部で委嘱した学校関係者の吉田評価委員、当所で委嘱した民間企業の関谷評価委員、国立中央青少年交流の家の藤原評価委員長の３名が務めた。それぞれの立場や視点に立った質疑応答により、参加者はこれまでの実践の価値や新たな視点を得ることができた。
○交流会を体育館でのスポーツとした。体を動かしながら、これまで経験のないスポーツに触れることで、協力しながら交流することができた。また、参加者のコミュニケーションが重要なスポーツであるため、積極的な交流につながった。
●より良い探究活動には、参加者、所属校、施設の協働での取組みが不可欠であると考える。今年度は早い段階から連絡を取り、学校に訪問する等の実践を行ってきた。これを他施設とも共有しながら、青少年教育施設としてどのように支援するかをまとめて来年度に生かしていきたい。